



「障がい者支援施設 三気の里」  
大津町大字森54-2  
昭和62年5月1日開所  
入所者数66人 平均年齢46.1歳

とても魅力にあふれた人たちですから、皆さんにも知ってほしい。



社会福祉法人 三気の会  
まつだ けん  
理事長 松田 健さん

三気の里は、創設者で初代理事長である田中稔さんが、開所して早いもので31年になります。田中さんの息子は自閉症で、わが子のために三気の里を開設しました。当時は自閉症などに対する理解が少なく、開設にはとても苦労したそうです。しかし地域の皆さんにはご理解いただき、多くの勉強会を重ねて今では最大の理解者になってきています。本当に感謝の言葉しかありません。

自閉症の人が多く利用する施設としては、当時は全国的にも少なく、他県からの利用も多かったのですが、今は環境整備も進み、地元で利用することができるようになりました。自閉症の皆さんは、とても魅力にあふれた人たちです。これからは、自閉症の人が困っていることを、障害のない人たちに分かってもらえるように努力していくことが、初代理事長の思いを継承していくことにつながると考えています。

三気の里とつくしの里は、大津町にある障害のある人が入所して生活する施設です。両施設ともに大津町で長年、障害のある人の支援を行っています。開所してからの今までのことと、障害のある人についてお話を聞きました。

Interview



社会福祉法人 清和会  
つくしの里 施設長  
おかわ しんじ  
小川 眞司さん

つくしの里は、小学校の特殊学級卒業生の保護者が集まり、設立した施設です。昭和60年頃、知的に障害のある人は県外の施設を利用していました。保護者の皆さんは県内に「親亡き後の安住の地」を求め、法人設立準備委員会を発足しましたが、資金集めや候補地の選定など、とても苦労されたそうです。しかし平川地区の皆さんは快く受け入れてくれて、この地に開設することができました。

地域を大事にしようと思い、大津北小の児童に施設に来てもらい、障害について学習会をやっています。「頑張ってもできないことがあるのが障害」「一人では生きていけないから助け合って生きていく」ことを伝えています。開設して27年が経ち、入所者も高齢化し、多種多様な支援が必要になっていますが、これからも利用者の皆さんの社会参加を通して、障害福祉についてももっと伝えていきたいと思っています。



「障がい者支援施設 つくしの里」  
大津町大字平川400  
平成3年8月1日開所  
入所者数52人 平均年齢48.0歳

「親亡き後」を案じた親の思いがつくしの里の開設につながった。

「知ることが「共感」に」  
時代が変わって法律などが整備されても、変わるのには社会などの環境です。障害のある人に対して私たちができることの一つは、三気の里やつくしの里、その保護者会の皆さん、先人たちが努力してきたことを知ることではないでしょうか。知ることは想像に、想像は共感につながります。共感とは、喜怒哀楽の感情を共有すること。障害のある人の環境が「今は良くなった」と想像しただけでも共感です。「まだまだ足りない」と考えることも同じ。障害のある人やその家族と同じ気持ちになることが共感です。それは、その人たちに無理に合わせるものではありません。自然と起こる感情です。北村さんや藤森さん、三気の里、つくしの里の皆さんにお話を聞きましたが、まだまだ知らないことが多くあります。次回は、障害福祉サービスや相談支援など行政が行う支援を説明します。いろんな人に話を聞きながら、障害福祉について理解を深めていきましょう。シリーズ障害福祉 つづく



第3期大津町障がい者基本計画  
(計画期間：H30年度～H35年度)

障害があってもなくても平成18年、障害者自立支援法が施行されました。障害の種類（知的、身体、精神）に係なく、障害のある人が、必要なサービスを利用できるように制度がまとめられ、平成25年には、「障害者の日常生活及び社会生活を総合的に支援するための法律」（障害者総合支援法）が施行されました。それまでは、障害のある人に、自立した生活を営むことができないための支援を行ってきましたが、障害者総合支援法の施行では、自立ではなく、基本的人権を持つ個人としての尊厳にふさわしい生活を営むことができるような支援を総合的に行うことになりました。

障害のある人を取り巻く環境が大きく変わっていく中で、昨年度に「第3期大津町障がい者基本計画」を策定しました。この計画の基本理念は「障がいがあってもなくても、互いに心ふれあい、ともに歩むまちづくり」としました。「大津町のこれからのまちづくり」に関する町民アンケート調査結果では、「障害福祉に対して関心がある」と回答した人が約7割あったのに対し、障害者差別解消法の認知度は約2割しかなく、「障害のある人に支援したいが何をすればよいか分からない」と回答した人については約5割となりました。社会生活のあり方やそのニーズが多様化する現在、障害のある人のニーズも同じように多様化しています。障害のある人が、自分の意思が尊重され、地域で生活できるような環境をつくるためには、基本理念のとおり、「互いに心ふれあい、ともに歩む」ことが必要となっています。では、心をふれあうためには、どうすれば良いのでしょうか。前ページで紹介した北村彰一さんの関係者に話を聞いてみましょう。



障害者を取り巻く環境の今。

障害者の仕事と趣味と

「バンドをやっているときは、息子の心配をしなくて良いんです」。彰一さんの母である北村豊子さんは話します。小学生の頃には童謡から言葉を覚えるなど、彰一さんの周りには音楽がありました。ひよんなことから出会った藤森さんたち音楽仲間。今までいろいろなイベントに参加したそうです。母が気にするのは「他のバンドや観客に迷惑をかけないだろうか」ということ。彰一さんの人生の中で先回りして心配してきたことは、バンド活動を始めたときにもありました。

彰ちゃんと一緒に活動すると、彼のいろんな能力も伸びていくし、他のメンバーも障害のある人への理解が深まります。音楽には力があります。彰ちゃんと一緒にライブを行うと、多くの子どもたちが見てくれるんです。彼の純粋さは子どもを引き付ける力があるんでしょうね。熊本地震でいつも練習していた場所が使えなくなったり、仕事も忙しく、最近あまり活動できていませんが、また活動を再開したいと思っています。復興したら復活ですね。



藤森 敬治さん  
仕事仲間とバンド活動をしていた時に、彰一さんと出会い、以後17年間にわたり、バンド「SUN」で活動しています。

しかし、心配は心配だけで終わります。藤森さんも「バンド活動を通じて」彰ちゃんは、大人になったと話す程でした。「好きな活動をするので、とても成長したんです。藤森さんたちに出会えて、本当に運が良かった」と豊子さんは目を細めます。平日の昼間は、大津あゆみ園に通っている彰一さん。作業をしている彰一さんの顔は、楽しくも真剣そのものです。しかしバンドで歌ったり、タンバリンを叩いたりしている顔には、満面の笑みがありました。仕事と趣味と。障害がある人でも、そんな思いを持つことは間違いではありません。人として当然の権利です。ただ多くの人がそれを願うには、まだまだ多くの障壁があります。私たちができることのヒントは、そこに隠れているかもしれません。



大津あゆみ園で作業する北村彰一さん  
バンド活動とは違う面を見せてくれました